

能登半島沖地震

災害支援に行ってまいりました



いずれも感染症が蔓延している中、自らも被災者でありながら、本部のスタッフとして日々努力されている方々、自宅に戻ることができない被災住民たちに、寄り添い活動して参りました。

活動報告

1/1に発災した能登半島沖地震では
栃木県看護協会からの依頼で、当院より2名の看護師が支援活動を行いました。

第1班	1/12～1/15	石川県輪島市	小学校避難所	派遣1名
第2班	1/15～1/18	輪島市	高等学校	派遣1名

災害支援ナース活動とは

- ①派遣先の現状を把握
派遣先で、私たちに求める事と、
私たちができる事が必ずしも一致するわけではない。
派遣先のニーズに応じた支援を続ける
- ②派遣先の運営者も被災者である
ねぎらうことを忘れない
不安に思うことを確認し取り除く

実際の活動内容

夜間の急患対応
感染対策
生活環境調整
日中健康相談
DVT・ストレッチ体操
心のケア

など

災害支援ナース心得

自己完結型看護支援
看護支援活動を遂行するために必要な物事を
支援者自らが責任もって準備、行動する事
どこでも眠れて、なんでも食べられて、どこでも排泄できる
そして「何とかなる」と思える

《看護の日特集の新聞記事に掲載されました》

ニーズ把握に努め 被災者に寄り添う



栃木県医師会塩原温泉病院
看護部長
田口 明希子さん

田口明希子さんは、1999床のリハビリを専門に行う病院に勤務し、看護部をマネジメントする業務に従事しています。今年1月1日、栃木県でも大きな揺れを感じた能登半島地震。「今回は派遣要請があるかもしれない」と心の準備をしました。10日に派遣依頼、12日には被災地へ。輪島市へ向かう途中で派遣先が変わり、情報もなく活動を始めることになりました。

避難所では田口さんと高橋さん、群馬県の看護師2人の4人1組で活動し、リーダーを務めました。避難所に着くと、運営者も被災者で疲労が極限の状況になっていました。「ねぎらい」の言葉をかけると、運営者がほっとした表情を浮かべました。そしてすぐにニーズの把握に努めました。「やれることには限界があり、被災者のニーズに優先順位をつけて活動しました」と振り返ります。

活動の意義を強調します。また「支援ナースを送り出した後、残って病院を守ってくれることも立派な災害支援です」と病院職員へ感謝の気持ちを忘れません。「日本は災害の多い地域。今回の貴重な体験を栃木県の医療・看護に生かしたい」と話しています。



避難所に血圧測定コーナーを設け待機する田口さん

いつか自分も支援される側になる。災害支援ナースもチームの一員である。協力してもらいたいことを的確に伝え支援を得る事が必要。

皆に伝えたい事

後方支援ナース（病院で留守を守る看護師）がいるから私たちが活動できる。自分たちが支援に行く間病院を守ること立派な災害支援である。

日本のどこかで災害は必ず起こります。看護師の力を必要とされるのであれば、私たち災害支援ナースは、今後も活動を続けてまいります。